

〔研究発表〕

①劉知幾の駢儷文批判について

名越 健人（國學院大學大学院）

中唐以降、韓愈・柳宗元らによって古文復興が提唱されるようになるが、その形成過程について、様々な領域・視点から議論が重ねられている。中でも清の趙翼以来、初唐期の史家達の動向が唐代古文の形成に及ぼした影響が指摘されてきたが、この視点に限っても十分に検討されているとは言い難い。特に初唐から盛唐期を生きた史家・劉知幾（661～721）が著した『史通』には、叙事篇を中心に比較的まとまりをもった形で、駢儷文の批判と古文への復帰を提唱する姿勢を見ることができる。しかし、このことについて詳細に論じた先行研究は極めて少ない。

本発表は、劉知幾の駢儷文批判と復古的意識、さらにはその後世への展開に焦点を当てて、唐代古文の形成過程の一端の解明を試みたい。

劉知幾の駢儷文批判の背景には、『文心雕龍』の「宗經」意識からの影響がとくに指摘されているが、『史通』随所に經書を史書の淵源と位置づけて理想視するとともに、時代が下るにつれて質的低下が起こるとする史書観が確認できる。さらに、彼は煩雑化が進む現今の史書を、典範として仰ぐ經書に回帰させる具体的な方法論を提示しており、これは『春秋』及び『左氏伝』を範とした「簡にして要」なる文体を志向するものであったことを指摘したい。

このような特徴を持つ劉知幾の文体論の後世への影響について、当時の史官であり、なおかつ古文家とも位置付けられる、蕭穎士に焦点を当てて考察を加える。彼も劉知幾と同様に、『春秋』に範を取った編年体史の復興と「簡にして要」なる文体を重視する姿勢が確認できる。さらに彼が劉知幾の子息である劉迅とも交友していたことを加味すれば、劉知幾の文体論が彼に与えた影響の大きさが窺い知れる。

以上を要するに、劉知幾が唐代古文の形成に果たした意義は、彼が史官として復古的な文体によって史書を綴る具体策を提示したことと、中唐期の前段階に位置した古文家に方法論的な影響を及ぼしたこととにあったと考えられる。

②任昉の詩文と『述異記』—「事」の観点からの一考察

郭 姣（名古屋大学大学院）

齊梁時代の著名な文士の一人である任昉については、その詩の特徴の一つが典故の多用であり、鐘嶸『詩品』では「競須新事」「動輒用事」と述べている。この特徴は任昉の文（ここで「文」は詩以外の全ての作品を指し、また「任筆」と呼ばれる。）にも表れ、明人孫月峰が任昉「為范尚書讓吏部封侯表」を「其趣味全埋在用事中」と賞賛していることから窺える。つまり、任昉の詩文全体は典故の多用の特徴があるということが分かる。

詩文の創作における「用事」の伝統には長い歴史があり、任昉は必然的に先達の影響を受けているが、同じく齊梁時代の文人たちの間で流行していた「徵事」「策事」の風習とも連動している。明人

胡応麟は「華陽博議」にて「六代文人之学有徵事、有策事。徵者共举一物、各疏見聞、多者为勝。(中略)齊梁之交、此風特盛。亦猶晋之清言。」と記載した。このような娯楽は博学の追求を具現し、そして博学を崇めている六朝文人にとって「事」が極めて広い概念で、そこに「物」が含まれ「万事」と「万物」の物事の略称となっている。

典故を多用し、特に「新事」に着目している文学者、また博物学者としての任昉もそうするはずだという想定した上で、任昉の詩文と他の著作を関連付けて考察する価値があるかもしれない。任昉は生前、『地記』二百五十二卷、『雜伝』二百四十七卷、博物地理類志怪小説『述異記』二巻など多くの著作を撰した。これらの書物に記録されたことは、任昉が接し、収集した「事」と考えられるだろう。ただ、残念ながら現存するのは『述異記』のみである。その序文に「将以資後來刀筆之士、好奇之流、文詞怪麗之端、抑亦博物之意者也。」とあるように、この小説が詩文の創作のためのものであることを示唆しているようだ。

しかし、この小説が偽書であるという嫌疑も見落とせない。本発表では、現行本任昉『述異記』のテキストの真偽の検証に基づき、典故の多用という任昉詩文の特徴とその『述異記』の性格との関係を、「事」の観点から明らかにしたい。

③陶淵明「擬古」詩其一を巡って

宇賀神 秀一(つくば国際大学 東風高等学校)

陶淵明の「擬古」詩九首のうち、とりわけ其一は、難解な作として知られる。従来の研究では、模擬詩に属するという観点から、模擬の対象となる古詩の特定が行われている。確かに其一は古詩の要素を備えるが、明瞭なもとたは不明である。加えて、数ある訳注書を通覧してみると、語り手の立場は旅人か、それとも待ち人か、という点で解釈が二分している。

さて、稿者の最終的な目標は、淵明の「擬古」詩九首全体の連作展開の有り様を明らかにすることにあるが、本発表では、次の二点を論じたい。第一に「擬古」詩其一について、連作的観点から新たな解釈を提示すること、第二に「擬古」詩それ自体から窺える「擬古」の意味を明らかにすることである。

改めて、「擬古」詩九首を連作として捉え直してみると、実は其一と其八、其二と其八は、緻密な連関性を持つ。たとえば、其八の語り手は、若き日の行旅を想起して、「誰言行游近、張掖至幽州」とうたっている。ここにいう「幽州」は、其二の語り手が向かう「無終」の属する州である。つまり、其八の語り手が想起する行旅は、其二に該当する。そうであるならば、其一も其八の語り手がいう「張掖」を舞台とする作として読み得るのではないか。そして、其一の舞台を「張掖」として捉え、他の典故表現等との関連をみたとき、その語り手のモデルとして浮かぶのは、漢代、匈奴の地で抑留生活を送り、故郷へと帰還した李陵の終生の友、蘇武である。「擬古」詩其一は、蘇武を語り手のモデルに据えながら、独自の表現されたものと考えられる。

このような観点から、「擬古」詩其一それ自体から浮かび上がる「古」についていえば、古詩よりも古人としての意味に比重がある。つまり、古詩を模擬したが故に古詩的なのではなく、語り手が古

人であるが故に古の措辞で表現されているのであろう。淵明の「擬古」とは、「古」人の言葉や生き様、ひいては「古」の世界を、丸ごと「擬」する態度で表現されたものであると考える。

④江淹詩賦における悼亡と神女との関わりについて

西川 ゆみ(志學館大学)

江淹は元徽二年(474)に主君劉景素の不興を買い、建安吳興(現福建省)に左遷された。その左遷期に自身の妻を亡くし、彼女を悼んで作った「悼室人詩」には、「神女」という高唐神女を指す語が見える。また後に潘岳「悼亡詩」を模した「潘黃門述哀」(「雜體詩三十首」)にも「帝女」の語が見え、先行研究では江淹悼亡詩における神女を詠うことの独自性が指摘されてきた。一方賦作品にも神女をモチーフとする作品として、「水上神女賦」「麗色賦」がある。これらの作品については、中国の研究をはじめとして、劉景素との君臣関係の面から解釈されてきた。

本発表では、「水上神女賦」「麗色賦」を君臣関係からとらえる先行の解釈に対し、これらの賦の主題が、「悼室人詩」と同じく妻の死であることを明らかにしたい。「麗色賦」は神女モチーフだけでなく、「悼室人詩」と共通する四季それぞれの情景を描く部分が登場し、「悼室人詩」と同じ発想のもと作られたことが指摘できる。「水上神女賦」は「麗色賦」と同じ典故を用いるなど関連性が見え、さらに先行する「神女賦」作品と比較すると、神女との離別の場面に死別を思わせる語彙が用いられている。以上の特徴から、「水上神女賦」「麗色賦」ともに主君への思いではなく、妻への哀悼を詠っていると考えられる。

さらになぜ江淹が亡き妻を描く際に神女のモチーフを用いたのか、その要因についても考察する。高唐神女は宋玉「高唐賦」に「朝雲」「行雨」とあり、また聞一多の研究によれば虹でもあり、天象と深い関わりを持つ存在である。吳興左遷期の江淹作品には天象を描く表現が随所に見られ、中でも「赤虹賦」は吳興に出現した虹を主題としており、左遷地の天象に関心を抱いていたことがわかる。また左遷地の自然を描く中で、「高唐賦」の語彙が見いだせることなどから、吳興の地が神女の出現する地になぞらえられていた可能性が指摘できる。

⑤六朝期の詩題における「寄」字の用法の成立について

住谷 孝之(愛知大学・愛知淑徳大学(非常勤講師))

一般に中国古典詩(漢詩)の詩題「贈～」 「寄～」には使い分けがあり、前者が直接相手に手渡す場合に用いられるのに対し、後者は人に託して送り届ける場合に用いられるとされる。しかしながら、六朝詩の詩題においては、このような使い分けが必ずしも適用されておらず、六朝の代表的文集である『文選』および『玉台新詠』に収録される詩に「寄～」の詩題が用いられている例は無い。例えば南齊の永明期の代表的詩人である謝朓の詩「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚」(暫く下都に使いし夜新林を發して京邑に至らんとするに西府の同僚に贈る。『文選』卷26)に明らかのように、そこでは「贈～」の詩題で「京邑」(建康)に赴く途上の作者が「西府(江陵)の同僚」に宛てて詩

を送り届けさせており、この時期の文学者には「寄～」との使い分けが未だ意識されていなかったことがうかがえる。

発表者は、こうした「寄～」という詩題の成立を探るため、『先秦漢魏晉南北朝詩』収録の詩作品から、六朝期の贈答詩の詩題を中心に調査を進めた。その結果、梁代の何遜・王僧孺等の贈答詩に「寄～」の詩題が出現していることが分かった。また、六朝末期を代表する詩人・庾信には「寄徐陵」「寄王琳」のような作のほか、「奉報寄洛州」「奉報窮秋寄隱士」のように、他者から「寄」せられた詩に対する返答の作も現存しており、この頃には「寄～」の詩題が、既に個別の詩人にとどまらずある程度の普及を見せていたことが推測される。

中国文学における贈答の詩は、詩人たちの相互の友好関係を確かめあう際の社交手段の一つであり、そこで詠われる友情はまた、中国古典詩の重要な主題の一つとなっている。本発表では、こうした贈答詩の文学史的な成熟の一端を知る手がかりとして、六朝期の「贈～」「寄～」およびこれに関連する詩題の用例を分類・分析し、可能ならばそのような詩題の使い分けが成立した要因についても探りたい。

[記念講演]

詩人と月——六朝から唐へ——

興膳 宏 (京都大学名誉教授)

[記念企画——興膳宏先生の世界をふりかえる]

①『乱世を生きる詩人たち 六朝詩人論』に学ぶ六朝文学研究の可能性と課題

佐藤 大志 (広島大学)

『乱世を生きる詩人たち 六朝詩人論』(2001)は、興膳先生が2000年3月に京都大学を停年退職されたことを機に、主に六朝(魏晉南北朝)の詩や詩人について論じたものを選んで一冊としてまとめられたものである。その「あとがき」には、「六朝文學についての全面的・体系的な理解を缺いては、唐代の文學をよく理解することはできないだろう」とあり、また現存する文献資料に限られる六朝期の文学研究は「資料の空隙を補うに足る豊富な想像力と鋭利な論理とが、戦略上の必要条件である」と記されている。本書の刊行当時、大学院を出て間もなかった発表者は、この言葉に六朝期の文学を研究することの意義や困難とともにその可能性と方法を教えられ、励まされたことが思い出される。

このたび改めて本書を読み直す機会を得、先生がどのようにその研究上の困難を乗り越えて、六朝期の詩や詩人たちの営為に迫ろうとしているのかを学ぶとともに、そこから読みとれる六朝文学研究の可能性と課題について考えてみたい。なお本書は、前半は嵇康の文学を契機とした魏晉期の文学の詩人とその詩に関する論文、後半は六朝後期の詩人と唐にかけての文学の展開に関する論文を収めるが、本発表では主に後半の論文を取りあげ、六朝期の文学を文学の流れのなかにもどのように位置づけ、研究するのかということについて改めて問い直す契機としたい。

②文学と儒教—『中国の文学理論』『中国文学理論の展開』を読み直す 渡邊 義浩（早稲田大学）

興膳宏先生の大著『中国の文学理論』・『中国文学理論の展開』の中核に置かれるものは、『文心雕龍』である。それは、一九八八年に、学位請求論文のために書き下ろされた「六朝期における文学観の展開」（『中国の文学理論』に所収）を踏まえ、興膳文学理論の集大成として書かれた「中国における文学理論の誕生と発展」（『中国文学理論の展開』に所収）の二に、「六朝文学理論の黄金期—『文心雕龍』と『詩品』」という題目が記されることに明らかである。

六朝時代に「中国文学」なるものが、儒教の規制から自立して存在し得たのか、という問題関心から『「古典中国」における文学と儒教』を著した渡邊は、『「古典中国」における史学と儒教』を著すなかで、劉知幾の『史通』に『文心雕龍』が圧倒的な影響を与えていることに気づいた。『文心雕龍』が「文」の起源を経書に求めることの影響のなかで、『史通』は、経書を史書の起源とすることで、史学を儒教の枠組みの中に整除している。

こうした視座で、興膳先生の『文心雕龍』論をもう一度読み返させていただき、儒教と史学、儒教と文学との距離感について考えてみたい。

③「創作技法論の展開—『文心雕龍』から『文鏡秘府論』へ」から二つの〈流れ〉を見る

道坂 昭廣（京都大学）

興膳宏先生の主要な研究が『文心雕龍』をはじめとする文学理論研究であることは周知のことである。早い時期の業績に『文心雕龍』（1968年 筑摩書房）、『詩品』（『文学論集』1972年 朝日新聞社。のち『合璧詩品書品』2011年 研文出版）の訳注があり、1986年には『文鏡秘府論』（筑摩書房）の訳注が刊行された。また文学理論に対する数多くの論考の一部は『中国の文学理論』『中国文学理論の展開』（『中国文学理論研究集成』2008年 清文堂出版）にまとめられている。

『中国詩文の美学』は作詩文の技法が実際の創作にどのように応用されているかを考察した論考がまとめられているが、本書の最初におかれる「創作技法論の展開」（以下、本論考）は、それらの論考を読むための解説としての役割をもつ。本論考が「展開」と名付けられているのは、『文心雕龍』から『文鏡秘府論』に収められている隋唐代の中国文学理論の〈流れ〉が考察されているからである。ただ私は、本論考には興膳先生ご自身の文学理論に対する研究の〈流れ〉も示されているように感じられる。

本書所収の諸論考や「『文鏡秘府論』における『文心雕龍』の反映」（『中国の文学理論』所収）、「中国における文学理論の誕生と発展」（『中国文学理論の展開』所収）などを權としつつ、本論考の中の〈流れ〉に乗ってみたい。